

小学校英語活動における語彙・表現の選択及び 指導方法に関する研究

岩井美香 (IWAI Mika)

鳴門市鳴門東小学校

要約

平成 23 年度から小学校に導入された外国語活動のねらいはコミュニケーション能力の素地の育成であり、いわゆるスキル面の定着や向上を目指してはいない。しかし、様々な語彙・表現にふれる機会を与えることが小学校英語の役割であるという考えは数多く聞かれる。そこで、どのような語彙・表現をどのような方法で指導することが最も効果的であり、且つ児童にとってプラスに働くのかを明らかにすることは重要なことであると考えた。

本研究では、小学校外国語活動において、英語の音声や表現に慣れ親しむ過程を通して自然に定着がすすみやすい語彙・表現及びその指導方法とはどのようなものかを実践を通して明らかにし、小学校における効果的な英語活動の在り方について提案する。

(キーワード：小学校英語活動，語彙・表現の選択，児童中心)

1. はじめに

小学校外国語活動のねらいはコミュニケーション能力の素地の育成であり、いわゆるスキル面の定着や向上を目指してはいない。しかし、英語でコミュニケーションを図るためには、ある程度の英語のスキルは不可欠なものであることから、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、つまり児童が意欲的に取り組む活動のなかで何度も「表現」を使いながら、その過程において副次的に定着がすすむことも期待されていると解釈できよう。(ここで取り扱われている「表現」とは、英語の「語彙」を意味しているものとし、本論文では「語彙・表現」あるいは「表現(語彙)」と表記する。)

その際、扱われるべき基本的な表現(語彙)、そして指導方法とは、どのようなものであろうか。『小学校学習指導要領』(文部科学省, 2008b)の「第4章 外国語活動 第3 指導計画の作成と内容の取扱い」では、「外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、児童の発達の段階を考慮した表現を用い、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定すること。」とある。また、『小学校学習指導要領解説外国語活動編』(文部科学省, 2008c)では、外国語でのコミュニケーションを体験させる際の指導に当たって取り上げる表現例を「コミュニケーションの場面」「コミュニケーションの働き」の二つに分けて具体的に提示しているが、

その指導方法については示されていない。どのような語彙・表現をどのような方法で指導するかは、各々の学校あるいは自治体、教師に任せられているのである。

そこで、本研究では、児童が英語の音声や表現に慣れ親しむ過程において、自然に定着がすすみやすい語彙・表現及びその指導方法について、授業実践、事例研究を通して検証し、小学校における今後の英語活動の在り方について提案する。

2. 小学校英語活動における語彙・表現の選択と指導方法

2. 1 小学校学習指導要領「外国語活動」に見られる語彙・表現の扱い

『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）』（文部科学省、2008a）では、小学校段階では「国際コミュニケーションをより重視する考え方」が基本とされ、英語の語彙・表現、文構造については体系的に教えないようにしなければならないとある。上記の答申を受けて、平成20年3月に告示された『小学校学習指導要領』（文部科学省、2008b）では、外国語活動の目標について「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と示された。同じく「第4章 外国語活動 第3 指導計画の作成と内容の取扱い」、『小学校学習指導要領解説外国語活動編』（文部科学省、2008c）において示されている小学校外国語活動において取り扱われるべき基本的な表現（語彙）とは、以下のようなものである。①児童の興味・関心にあった表現（語彙）であること、②児童の発達段階を考慮した表現（語彙）であること、③特有の表現がよく使われる場面と児童の身近な暮らしにかかわる場面で使用される表現（語彙）であること、④コミュニケーションの働き（役割）を実感できるような表現（語彙）であること。

小学校外国語活動では、以上に述べたような語彙・表現を指導者が選定し、目標である「コミュニケーション能力の素地を養う」ことが求められているのである。

2. 2 小学校外国語活動における語彙・表現の指導方法

小学校学習指導要領（2008）、及び小学校学習指導要領解説外国語活動編（2008）には、語彙・表現の指導方法について具体的には示されていない。「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」指導方法とは、どのようなものであろうか。大城・直山（2008）は、外国語活動の指導を効果的に行うための活動として、①「聞く」ことが中心の活動、②「話す」ことが中心の活動、③「聞く・話す」を組み合わせた「コミュニケーション」することが中心の活動、の三つの活動を示し、児童に慣れ親しませたい語彙や表現を繰り返し聞かせたり、言わせたりする際に有効な活動としては、歌やチャンツ、ゲームを挙げている。そして、外国語活動の目標の一つである「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」とは、相手の思いや話の内容を理解しようとするとともに、自分の思いを相手に伝えようとする態度のことであるとし、このような態度は実際に人とコミュニケーションを図る中で培われると述べている。兼重・直山（2008）は、小学校外国語活動は、英語それ自体の向上を目指すものではなく、ツールとして使いながら慣れ親しむものであるとし、その方法について、「①チャンツや歌を取り入れながら、英語のもつリズムに慣れさせる。

②ネイティブ・スピーカーや担任の使う英語を聞き、英語に慣れさせる。③ CD や ICT などの教材を利用しながら、英語の音声やリズムに慣れさせる。④ペア・ワーク等の活動で、英語を自ら発話することで、英語に慣れさせる。」と示している。また、これらの事柄は、授業中に自然にとり行われなければならないとしている。

児童の発達段階を考慮すると、歌やチャンツ、ゲームは慣れ親しませたい語彙・表現を繰り返し聞かせたり、言わせたりするために有効な手段であろう。そして、慣れ親しんだ語彙・表現を使う活動としてコミュニケーション活動や自己表現をしたくなるような場（児童が知っている語彙・表現を使って自分を表現しようとしたり、普段聞き慣れた語彙・表現が思わず口から出たりするような場）を設定することが求められている。「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」指導方法とは、「歌やチャンツ、ゲーム、コミュニケーションや自己表現を目的とした活動」を取り入れた指導であるといえるだろう。「慣れ親しむ」とは、定着を図ることではないが、児童の自己表現やコミュニケーションのために必要な語彙・表現を、教師が活動の過程（歌やチャンツ、ゲーム）に仕組むことによって記憶に保持されることはありうると予想される。

3. 授業実践

3. 1 授業実践の目的

授業実践を行うにあたり、具体的に次のような3つの課題を設定した。

(1) 語彙・表現の選択方法については、①既存教材（『英語ノート』）から選択した語彙・表現、②教師が選択した語彙・表現、③児童自身が選択した語彙・表現の3タイプにおいて、児童の語彙・表現の保持への影響はあるのか。

(2) 指導方法については、歌やチャンツ、ゲーム、コミュニケーションや自己表現を目的とした活動（「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」指導）を通して、授業中に取り扱った語彙・表現は、児童に保持されるのか。

(3) (1) で示した3タイプの語彙・表現を(2)のような方法で指導した場合、児童の英語活動への意識（関心・意欲）に影響はあるのか。

以上3つの課題について、授業実践および児童への調査から考察し、小学校における効果的な英語活動の在り方を提案する。

3. 2 授業実践の手順

①児童の実態把握のための事前アンケート（平成22年3月）

②使用語彙・表現の抽出：

授業で扱う語彙・表現、児童が既に知っている語彙・表現の事前調査（平成22年6月）

③授業実践（平成22年6月～7月）：

授業の様子はビデオ撮影し、教師、児童の発言や行動の書き起こしをする。

毎時間の自己評価カード（振り返りカード）の分析：児童の英語活動への意識を把握

第4時に児童が発表した表現を英語で書き起こす。

④ポストテスト1（調査Ⅰ）授業実践（全4時間）直後（平成22年7月）

授業で取り扱った語彙・表現が保持されているかを調査：

表現を絵で示し、英語で言えるかどうか、また言える表現については英語で言うとうくなるかをカタカナで表記させる。

⑤ポストテスト2（調査Ⅱ）授業実践終了から約2ヶ月後（平成22年9月）

授業で取り扱った語彙・表現が保持されているかを調査：

筆者と児童1名の一対一の面接形式で行い、授業で使った絵カードを児童に示し、英語で言わせる。DVDに録画した映像と音声（ALTに依頼して撮影）からその表現に合う絵を指差させる。 ※調査Ⅱの様子は全てビデオ撮影され、後日評価を行った。

3.3 授業実践の概要

＜実施時期＞ 平成22年6月24日（木）～ 7月15日（木）

＜実施校・学年＞鳴門市内公立A小学校第5学年（1学級、10名）、第6学年（1学級、12名）

＜使用教材（単元）と授業時数＞

第5学年：『英語ノート1』Lesson4 I like apples. 自己紹介をしよう（全4時間）

第6学年：『英語ノート2』Lesson4 I can swim. できることを紹介しよう（全4時間）

＜授業形式＞学級の実態をふまえ単元指導計画を作成し、筆者（T1）、担任教師（T2）によるティーム・ティーチング体制（数時間はALT、ゲストティーチャー（GT）が加わる）により授業実践を行った。

（1）第5学年における授業実践

単元（『英語ノート1』Lesson4 I like apples. 自己紹介をしよう）選択の理由としては、児童が選択できる語彙・表現の範囲が制限されておらず、様々な語彙・表現が出されることが期待できると考えたからである。コミュニケーションや児童の自己表現を目的とした活動、児童が英語を発話したくなる場を設定するために、第1時に「（第4時に）ALTに自己紹介をしよう」という最終的な目標を児童に知らせ、その目的に向かって学習を進めた。全4時間の授業に組み入れた活動は、チャンツ、ゲーム（キーワードゲーム、伝言ゲーム、ミッシングゲーム、インタビューゲーム等）の他、○×クイズ（ALTの発話"I like ~." がうそか本当かを予想する）、T1・T2の好きなものを当てるクイズ等クイズ形式の活動を取り入れ児童の興味、関心を高めた。第2時に「自分の好きなもの」をカードに絵と日本語で書かせ、その英語表現を児童自身が選択した語彙として授業に組み入れた。第4時では、「好きなもののカード」を見せながらALTに自己紹介をするという形をとった。取り扱った語彙・表現を＜表1＞に示す。

（2）第6学年における授業実践

単元（『英語ノート2』Lesson4 I can swim. できることを紹介しよう）選択の理由としては、第5学年と同様に児童が選択できる語彙・表現の範囲が制限されておらず、様々な語彙・表現が出されることが期待できると考えたからである。第1時にGT（鳴門教育大学の留学生）を招き、出身国（セルビア）の話をしていただいた。その中で「セルビアで人気のスポーツ」「セルビアの子ども達の遊び」等を紹介してもらい語彙・表現を導入した。そして、コミュニケーションや児童の自己表現を目的とした活動、児童が英語を発話したくなる場を設定するために、「（第4時に）スベトラナさん（GT）をもう一度招き、自分のできることを紹介しよう」という最終的な目標を児童に知らせ、その目的に向かって学習を進めた。全4時間の授業に組み入れた活動は、歌（"Who can ski?" 『歌っておぼえるらくらくイングリッシュ』（成美堂）より）、チャンツ、ゲーム（キーワードゲーム、ジェスチャーゲーム、インタビューゲーム等）

の他、○×クイズ（GTの発話"I can ~."がうそか本当かを予想する）、"Who am I?" クイズ（「I can ~.」の表現を聞き校内の誰先生かを予想する）等クイズ形式の活動を取り入れ児童の興味、関心を高めた。第2時に「自分のできること」をワークシートに日本語で書かせ、その英語表現を児童自身が選択した語彙・表現として授業に組み入れた。第4時ではワークシートを見ないでGTにできることを紹介し実演するという形をとった。取り扱った語彙・表現を＜表2＞に示す。

＜表1＞第5学年における授業実践で取り扱った語彙・表現

①『英語ノート』から選択した語彙・表現	rabbit, <u>ice cream</u> , strawberry, skiing, <u>swimming</u> , <u>cat</u> , apple, milk, <u>dog</u> , banana, fish, soccer, <u>baseball</u>
②教師が選択した語彙・表現	dolphin, <u>music</u> , <u>math</u> , <u>red</u> , seaweed, (sea) otter, sweet potato, panda, travel, (Awa) dance, <u>okonomiyaki</u> , P.E.
③児童自身が選択した語彙・表現	<u>yakiniku</u> , <u>sashimi</u> , red panda, hamster, cooking, cherries, jellyfish, running, melon, volleyball, curry and rice, piano, turtle, lion, yellow, purple, blue, green, Edison, Ichiro

＜表2＞第6学年における授業実践で取り扱った語彙・表現

①『英語ノート』から選択した語彙・表現	<u>swim</u> , <u>play table tennis</u> , play baseball, play soccer, play the piano, play the guitar, <u>ride a unicycle</u> , <u>play kendama</u>
②教師が選択した語彙・表現	play tennis, play <i>lastrez</i> (セルビア語で「ゴムとび」), write <i>katakana</i> , <u>cook</u> , <u>jump rope</u> , make pizza, make <i>miso</i> -soup, dance, sing, <u>skate</u> , ski, run fast, jump high, <u>paint a picture</u> , <u>draw a picture</u> , play the trumpet, spin a top, play the hula hoop
③児童自身が選択した語彙・表現	play the xylophone, juggle, dance <i>Awaodori</i> , play a yo-yo, sew, calculate, play the alto-horn, play the trombone, play basketball, spin a basketball, do <i>kendo</i> , sleep everywhere, (make GUNDAM-model, say ~)

※①、②のうち、下線を付したものは、「児童自身が選択した語彙・表現」でもある。

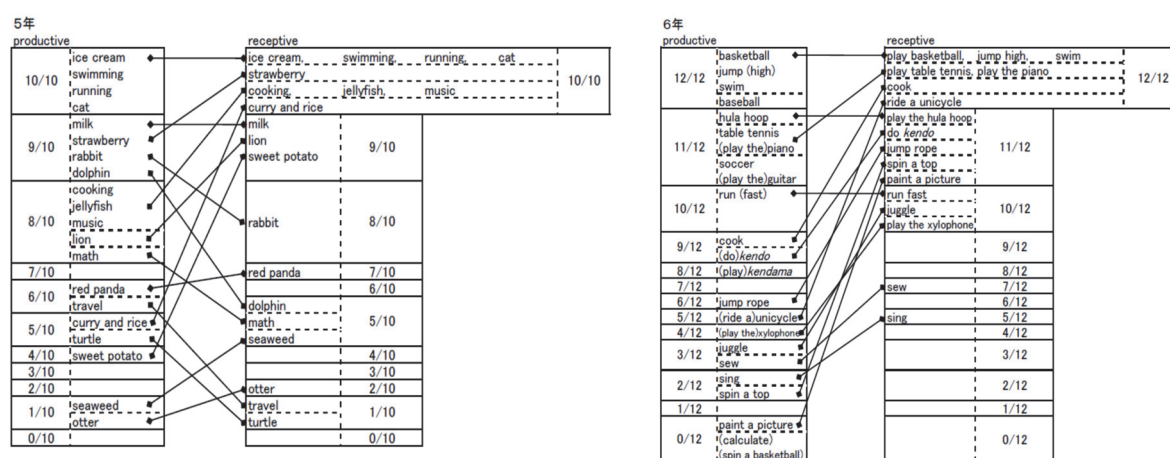
＜表1＞、＜表2＞の「③児童自身が選択した語彙・表現」をみると、「①英語ノートからの語彙・表現」「②教師が選択した語彙・表現」の中からも選択しているが、児童自身が本当に言いたいこと、伝えたいことが他にも多くあることが分かる。

4. 結果と考察

調査Ⅰの結果、授業実践直後では、授業で取り扱った語彙・表現の多くは記憶に保持されているが、聞き馴染みのない語（seaweed, otter 等）や、複雑な表現（paint a picture 等）は、授業実践直後であっても記憶には保持されていなかった。児童自身が選択した語彙・表現は、授業中に発表に向けて繰り返し児童各自が練習を重ねたこともあり、『英語ノー

ト』から選択した語彙・表現，教師が選択した語彙・表現よりも保持状況がよかった。

調査Ⅱの結果，授業実践終了から約2ヶ月後では，授業で取り扱った語彙・表現は，①『英語ノート』から選択した語彙・表現，②教師が選択した語彙・表現，③児童自身が選択した語彙・表現にかかわらず，発表（産出）の面においては調査Ⅰに比べて記憶の保持率は低下しており，表現が複雑である6年では，自分自身が発表した語彙・表現においても記憶に残っていないものが多い（5年では児童2を除いて保持されている）。しかし，繰り返しの練習を行わなくても，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる指導方法において，児童の記憶に発表語彙として保持される語彙・表現があるという結果が本調査から得られた。次に調査Ⅱの結果から，発表（産出）と受容における語彙・表現の保持状況を図に示すと，＜図1＞，＜図2＞のようになる。



＜図1, 2＞ 発表と受容における語彙・表現の保持状況（5年(左), 6年(右)）

この図から，発表語彙（産出語彙）に比べて受容語彙が高い正解率を示しているものと，発表語彙より受容語彙が低い正解率を示しているもの（5年の5語 rabbit, dolphin, turtle, math, travel）があることが分かる。6年では，表現が複雑になっているにも関わらず，全ての語彙・表現で受容語彙が高い正解率，あるいは発表語彙と変わらない正解率を示しており，児童は英語の表現を聞いてその意味が分かる能力を伸ばしていると考えられる。一方，5年では，児童自身が「言うことができる」と思っている語彙・表現の音声と，実際の音声が違うということが考えられる。それぞれの語彙・表現を見てみると，「rabbit → ラビット，dolphin → ドルフィン，turtle → タートル，travel → トラベル」のように，外来語（カタカナ）として児童が生活の中で聞くことがある，あるいは馴染みのあると思われるものにおいて，受容の正解率が下がっている。児童自身が「言うことができる」と思っていることから，その英語表現を「聞く」ことに対して意識が向いていないことも考えられる。これらの語彙・表現を指導する場合には，児童自身が発する音声と実際の聞いた音声が違うということのないように，注意することが必要であると考えられる。

今回の授業実践を通して，児童の英語活動へ意識にはどのような影響がみられたのか，毎時間の自己評価カードの記述から分析すると，児童一人ひとりの英語活動への意識には変容が見られた。

<事例① 意欲の向上>

児童は、英語の表現を知ることにより喜びを感じ、英語でのコミュニケーション活動に対して満足感を得ており、英語活動に取り組む意欲を高めていることが伺える。

〔5年 児童A〕

第1時	キーワードゲームが一番楽しかったです。アイスクリームや魚の英語をたくさん知りました。 <u>また英語をしたいです。</u>
第2時	前の人に知らせるゲームがとっても楽しかったし、英語で伝えられてよかったです。 <u>またしたいです。</u>
第3時	今日の英語でカレーライス（を好きな人）を9人も聞けたのでうれしかったです。まだちょっとアイライクをつけていなかったところもあったので <u>次の英語は気をつけて言えるようにしたいです。</u>
第4時	ナターシャ先生に話すときにはずかしかったけどできてうれしかったです。 <u>またしたいです。</u>

<事例② 達成感・満足感>

6年児童の記述からは、GTに自分のできることを伝えることができたことに達成感・満足感を得ていることが伺える。

〔6年児童A〕

スベトラーナさんに特技を見てもらえてうれしかった。

〔6年児童B〕

スベトラーナさんに発表するときに、英語が上手く言えたのでよかったです。

<事例③ 新たな発見>

ALTやGTから様々な情報を得ることや、様々な活動を通して、友達や教師についての今まで知らなかったことを知ることに対して喜びや驚きを感じている児童も多い。

〔5年 児童B〕

第1時	すごく発表ができた。5回くらいできた。 <u>ぼくはブラックが好きだけど先生はレッドが好きなのが初めて分かった。おもしろかったです。</u>
第3時	<u>みんなの好きなものがわかった。</u>

〔6年 児童C〕

第1時	スベトラーナさんが来てくれて <u>テニスセルビアで大人気だというのがびっくりしました。</u> スベトラーナさんが、カタカナで自分の名前を書けるのがかっこよかったです。
第3時	<u>人形作り（さいほうする）がソールというのがびっくりした。ドゥーケンドウを初めて知った。</u> 早くスベトラーナさんに作った人形を見せてあげたい。よろこんでくれるといい。ナターシャ先生がソールという言葉を教えてくれた。

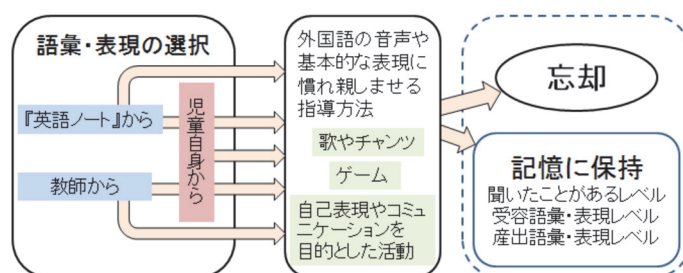
ここで、3. 1で挙げた3つの課題に対する答えを述べる。課題（1）について、授業の中で取り扱った語彙・表現は、授業直後では、「③児童自身が選択した語彙・表現」が最も記憶に保持されている。しかし、約2ヶ月後の発表語彙としての調査では、①『英語ノート』から選択した語彙・表現、②教師が選択した語彙・表現、③児童自身が選択した語

彙・表現にかかわらず記憶の保持率は低下、あるいは変化がなく、3タイプの間にはほとんど差は見られない。また、受容語彙の調査でも3タイプの間にはほとんど差は見られなかった。よって、本調査においては、時間の経過（約2ヶ月後）とともに語彙・表現の選択方法の違い（3タイプ）は児童の記憶の保持にはほとんど影響しないという結果が得られた。

課題（2）については、保持されやすい語と保持されにくい語があるが、繰り返しの練習を行わなくても児童の記憶に保持される語彙・表現がある。また、受容語彙の調査では、ほとんどの語彙・表現で保持率が非常に高かった（5年の調査Ⅱでの5語（rabbit, dolphin, turtle, math, travel）を除く）。「言うことはできない」が、「聞いて意味が分かる」語彙・表現が多くあることから、児童は授業中に取り扱った語彙・表現に慣れ親しみ、その結果としてそれらが記憶に保持されることがあるといつてよいと考える。

課題（3）については、外国語活動におけるコミュニケーションや自己表現を目的とした活動を通して、児童の意識には、意欲（次時の学習への、また英語活動そのものへの意欲）の向上、達成感・満足感、新たな発見というプラスの効果があることが、本調査の結果より分かった。授業中に扱った語彙・表現が記憶に残らなくても、授業のその場において一時的に保持されていた表現をALTあるいはGTに伝えることができたことが児童にとって意味をもつ。また、児童にとって聞いて意味のある英語の語彙・表現を授業で取り扱うことは、英語表現だけに限らず今まで知らなかったことを新たに知る喜びを感じることになる。

5. まとめ



＜図3＞ 小学校英語活動における語彙・表現の選択と児童の学習過程

＜図3＞は、小学校英語活動における語彙・表現の選択と児童の学習過程をモデルにしたものである。これが示すように、結果として「記憶に保持される」語彙・表現あるいは記憶に保持されず「忘却」される語彙・表現があるが、コミュニケーションや自己表現を目的とした活動を通して、児童の意識には、意欲の向上、達成感・満足感、新たな発見というプラスの効果がある。宗（2007）は、英語活動に取り上げる語彙・表現は、自然にインプットされ子どもの中に蓄えていくとし、それを「結果としての習得」と呼んでいる。しかし、語彙・表現が児童の記憶に蓄えられている状態は「習得」とは言い難く、「蓄積」と表現した方がよいであろう。小学校では、「定着」、「習得」ではない学習活動を行っているが、英語活動において取り扱った語彙・表現は、児童に蓄えられていっていると考えられる。記憶に保持されず「忘却」される語彙・表現であっても、授業で取り扱ったものであることに変わりはない。

小学校外国語活動では、コミュニケーションや自己表現において必要な語彙・表現を定着させるのではなく、授業のその場で一時的に保持され表現できただけであっても児童にとっては意味をもつ。このような特徴をもつ小学校外国語活動が、英語教育という枠組みの中で担う役割とはどのようなものであろうか。本研究のまとめとして、効果的な語彙・表現の選択とその指導方法について3つの提案をする。

(1) 児童中心の語彙・表現の選択

外国語活動では、全国の小学校において『英語ノート』が教材として使用されることが多いであろう。『英語ノート』には国際理解の視点から英語圏以外の国の文化を表す語彙や日本の文化を表す語彙が多く取り扱われている。そして、外国語活動の指導者には、児童の発達の段階を考慮して語彙・表現を選定し、地域の実情や児童の実態を踏まえ複雑にならないように示すことが求められている。様々な語彙を取り上げることによって、児童は語彙を広げることができる。そして、『英語ノート』から取り上げた語彙・表現や教師が示した語彙・表現を参考にして、児童は自分が本当に言いたいこと、伝えたいことを自ら選んだり、違うものを新たに考えたりする。外国語活動では、児童の自然なコミュニケーションを引き出し、児童がコミュニケーションの楽しさを体験するために必要となる語彙・表現の選択が重要になる。取り扱われるべき語彙・表現が具体的に示されていないからこそ、児童中心の語彙・表現の選択ができるのである。教師にとって扱いやすい語彙や、教師が教えたい語彙を言語材料として選ぶことは望ましくない。児童自身が本当に言いたい、伝えたい語彙・表現、つまり児童にとって意味のある語彙・表現を授業で取り扱うことが効果的であろう。

(2) コミュニケーションや自己表現を目的とした活動

外国語活動では、歌やチャンツ、ゲーム等を通して慣れ親しんだ語彙・表現を使い、コミュニケーション活動や自己表現をしたくなるような場を設定することが効果的である。このような活動を通して、児童の意識には、英語活動そのものへの意欲や次時への活動への意欲の向上が見られ、達成感や満足感を感じることができ、英語表現だけに限らず今まで知らなかったことを新たに発見する喜びも感じることができるというプラスの効果がある。そのための手段として、英語を話したい、英語で伝えたいと児童に思わせるような場面設定をすることが重要である。授業中に取り扱った語彙・表現が記憶に残らなくても、その場面において英語で発表ができた、伝えることができたという思いが児童の記憶に残ることが重要視されるべきではないだろうか。コミュニケーションや自己表現を目的とした活動とは、児童の「言いたい」「伝えたい」という思いを大切にし、「言いたいことが言えた」「伝えたいことが伝わった」という達成感や満足感、喜びを感じさせることのできる活動である。小学校において児童の心に深く刻まれたそのような思い出が、中学校以降の英語教育において学習者の意識にプラスに働くことは予想できることである。このように考えると、英語表現を身につけさせることだけが目的と思われる定型練習（パターンプラクティス）のような機械的な繰り返し学習については、小学校の英語活動においては望ましくないものであると考える。

(3) 語彙・表現の指導方法

一般的に受容語彙は発表語彙の2倍と言われている（初級学習者ではその差はあまりないと言われている）が、4.5.2の調査Ⅱの結果と考察で述べたように、発表語彙に比べて

受容語彙が低い正解率を示している語彙・表現がある。児童自身が「言うことができる」と思っている語彙・表現の音声と、本当の英語の音声が違うということが起こっていると考えられる。外来語（カタカナ）として児童が生活の中で聞くことがある、あるいは馴染みのあると思われるもの（例えば「rabbit → ラビット」「dolphin → ドルフィン」等）において受容の正解率が下がっていることから、これらの語彙・表現を指導する場合には、児童自身が発する音声と実際に聞く音声が違うということのないように注意して指導を行う必要がある。

このようなことに関する指導法として、語彙・表現の導入の方法について、できるだけネイティブスピーカーの発音（ALT の発音、CD・ビデオの音声）を児童に聞かせたり、日本語の外来語の発音と、実際の英語の発音の違いを特に意識させたりして指導することが大切であると考え。また、英語を第2言語あるいは外国語とする人と交流を持つ機会を設けるなどして多様な英語を聞かせることにより、世界中では様々な英語が話されていることに気づかせることも重要なことであると考え。

6. 今後の課題

本論文では、授業実践および児童への調査から得た結果をもとに、小学校英語活動における効果的な語彙・表現の選択とその指導方法について提案をした。しかし、本研究は少人数の児童を対象に行った実践研究であり一般化は困難である。今後継続的に実践を通して、本提案を実証していきたいと考えている。

また、平成 24 年度より新学習指導要領のもと始まる中学校外国語科との連携についても考えていきたい。新学習指導要領では、授業時間数が 105 時間（週 3 時間）から 140 時間（週 4 時間）に増やされる。そこでは、言語材料のうち、語彙については必修語を別表に示すことをやめ、3 年間に学習する総語数を「900 語程度」から「1200 語程度の語」に変更されている。小学校では、定着や習得を目的とはしない学習活動を行っているが、児童には「忘却」「記憶に保持されている」語彙・表現もあると考えられる。このような外国語活動で触れた様々な語彙・表現を中学校でも効果的に活用し、新しい学習指導要領のもと、より成果の上がる中学校外国語科について中学校英語教員との連携を図りながら研究・実践を深めていきたい。

引用文献

- 兼重昇・直山木綿子（2008）『小学校新学習指導要領の展開外国語活動編』東京：明治図書。
文部科学省（2008a）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）」。
文部科学省（2008b）『小学校学習指導要領』。
文部科学省（2008c）『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館出版社。
大城賢・直山木綿子（2008）『小学校学習指導要領の解説と展開 外国語活動編』東京：教育出版。
宗誠（2007）『小学校ならではの英語活動～国際コミュニケーションの素地をつくる～』松川 禮子（監修），p.42，東京：文溪堂。